

「社会文化史データベースー性風俗稀少雑誌コレクション」 解説

性社会・文化史研究者／明治大学非常勤講師 三橋 順子

はじめに

このデータベースは、性社会文化史研究者である私（三橋順子）が収集した 1950 年代に刊行された性風俗を主なテーマとする雑誌を、全頁撮影、画像データ化し、記事目録を作成したものである。

収集の範囲は、私の研究テーマ、性別越境（女装、男装、性転換）、買売春（「赤線」、街娼など）に関するもの、および書誌的関心に依っていて、まったく網羅的ではない。

収録した雑誌は、1950 年代刊行のものを中心に、1960 年創刊の『風俗奇譚』を加えた。さらに「雑誌」とは言えないが、1950 年代後半に刊行された女装愛好者の頒布誌『演劇評論』をその稀少性を考慮して特に収録した。

逆に『あまとりあ』『100 万人のよる』など、収集はしているが、すでに一部復刻されているものは収録から除いている。

結果、併せて 29 誌 458 冊、約 8 万頁、4 万コマ、記事数 1 万点超のデータベースとなった。

1 なぜ 1950 年代か？

1940 年代後半（昭和 20 年代前半）、敗戦後の社会的混乱期、戦時中の出版統制が解除されると、性風俗などをテーマにした粗悪な紙質の雑誌が数多く刊行された。それらの多くは短命で、3 号くらいで出版元が倒れる（倒産する）ことから、3 合飲むと悪酔いして倒れる粗悪な酒「カストリ焼酎」（酒粕から作った密造酒とされるが、たぶん違う）にたとえて「カストリ雑誌」と呼ばれた。

当時の日本は、連合国軍による占領下（occupied JAPAN）であり、「カストリ雑誌」を含むすべての出版物は、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が設置した民間検閲支隊（CCD）によって集められ検閲を受けた。そして、民間検閲支隊の解体後、検閲目的で集められた出版物は、参謀第二部・戦史室長を務めていたゴードン・ウィリアム・ブランゲ（1910～1980 年）によって、アメリカのメリーランド大学に移送され、しばらく死蔵されていたが、1978 年にゴードン・W・ブランゲ文庫（Gordon W. Prange Collection）と命名され、ようやく整理・研究が進められることになった。そして、この膨大な資料群はマイクロフィルム化され、その複製（マイクロフィッシュ）が国立国会図書館、国際日本文化研究センターなどで閲覧できるようになった。

「カストリ雑誌」の実物は残存数が少なく、現在では完全な収集は困難だが、ブランゲ文庫のお陰で、1949 年中頃までの雑誌についてはほぼ全容の把握と、研究に必要な資料の抽出が可能である。

しかし、1949 年 10 月に、GHQ による検閲が終了した後、1950 年代に出版された性風俗雑誌は、体系的に収集・保存している機関がなく、全体像の把握、書誌研究が大きく遅れていて、戦後の社会文化史研

究の「穴」になっている。

私は、2010 年頃から、研究資料として 1950 年代に刊行された性風俗雑誌の収集を始め、幸い『風俗草紙』『風俗科学』の 2 誌はコンプリート（完全収集）することができた。また 1960 年代の代表的な性風俗雑誌『風俗奇譚』も、諸先輩から譲られて、かなりの量を所蔵している。他の雑誌の収集は、きわめて不十分ではあるが、私も高齢者の仲間入りで、収集の進行を待っている状況ではなくなりつつある。集めた雑誌を研究資料として後世に残す必要性を強く感じ、今回、丸善雄松堂の助力を得てデータベース化に踏み切った。

2 「雑誌」とは？

「雑誌」とはなんだろう？ 辞書的に言えば、「雑誌」とは定期（逐次）刊行物のことである。定期刊行物の俗称が「雑誌」であるとも言える。定期刊行物は、文字通り、定期に刊行される書物であるが、一般には綴じられた形態（冊子体）のものを指し、綴じていない（折りたたまれた、または 1 枚刷り）形態のものは「新聞」と呼ばれる。

「定期」といっても刊行間隔は様々で、年刊（1 年に 1 度）、季刊（3 ヶ月に 1 度）、隔月刊（2 ヶ月に 1 度）、月刊（1 ヶ月に 1 度）、隔週刊（2 週に 1 度）、旬刊（10 日に 1 度）、週刊（1 週に 1 度）、日刊（毎日）などがある。現在は、月刊誌と週刊誌がほとんどだが、1950 年代には、それに加えて旬刊誌があった。

旬刊は日の末尾の決まった数字の日、たとえば、「1 の日」なら 1 日、11 日、21 日、「5 の日」なら 5 日、15 日、25 日に刊行する形態で、キリスト教由来の七曜日が浸透する以前の日本の伝統的な生活習慣に基づいている。現在は映画評論誌『キネマ旬報』にかろうじて名前を残している（現在は月 2 回刊行で旬刊ではない）。

「雑誌」には編集者がいて、一定の編集方針のもとに、複数の人（記者、外部のライター）が書いた複数の記事が 1 冊に掲載されるという特色がある。その内容は、事件記事、探訪記事（ルポルタージュ）、インタビュー記事、対談、座談会、コラム、漫画、小説、グラビア（写真頁）などきわめて多様、雑多である。

1 冊のうちに雑多な記事があることが「雑誌」の最大の特徴である。読者は、目当ての記事を読むために雑誌を購入するが、同時に必ずしも興味がない記事も手にすることになる。その点、現代の読みたい記事だけが読めるネット媒体とは異なり、不合理のように思われるが、おのずから広い知識に接することができるという利点もあった。

3 「性風俗雑誌」とは？

「性風俗雑誌」とは、「雑誌」のうちで特に性風俗・性現象を主なテーマとするもの、あるいは結果的に性風俗関係の記事が多いものを指すが、どの程度、多いかには厳密な定義はない。

1950 年代の「性風俗雑誌」の内容は様々であり、雑誌によって特色がある。大衆的な娯楽誌の体裁をとる『りべらる』、体裁とか関係なく、ともかく性愛についての話を集める『デカメロン』『怪奇雑誌』など、知識人を意識して性科学・性文化の専門誌と銘打つ『人間探究』『あまとりあ』『風俗科学』など、当時は

「変態性欲」と言われた非典型的なセクシュアリティ、具体的には同性愛やサディズム（加虐性愛）&マゾヒズム（被虐性愛）に力点を置いた『風俗草紙』『奇譚クラブ』など、フェティシズム（拝物愛）の記事が多い『奇抜雑誌』など、まさに「百花繚乱」の感がある。それら「獵奇雑誌」とは一線を画す「特ダネ実話雑誌」と銘打った『真相実話』は、後の「実話系雑誌」の元祖といえる。また『内外特報』→『内外旬報』は記事の内容が多岐で、現代の週刊誌に通じるものがある。さらに『千一夜』『青春ロマンス』『青春タイムス』『読切ロマンス』のように小説（フィクション）に重心をおいた雑誌も多かった。

1950年代の「性風俗雑誌」では、記事を書いた人の名（筆者）が記された署名記事が圧倒的に多いが、「編集部」のような形で無署名の記事もある。ただし、署名記事であっても、実際は編集部の記者が書いていたり、読者投稿ですら編集部の記者が書いている場合もある。また外部のライターも複数の筆名を使い分けていることがしばしばある。とくに女性名の筆者による記事は、本当に女性が書いたものか疑う余地が多分にある。

この時代の「性風俗雑誌」の値段は、かなり幅があり、薄手の旬刊誌は30円、月刊誌は60～70円が標準で、100円が上限という感じだった。1952年頃の物価は、もりそば17円、天井80円、山手線初乗り10円、映画が80円で、ばらつきがあり現在との比較は難しいが、およそ15倍という感じだろうか。とすると、定価30円の旬刊誌『内外特報』は450円で現在の週刊誌の値段に近く、定価100円の『風俗草紙』や『風俗科学』は1500円となり、少なくとも価格的にはかなり高級誌ということになる。

4 なにがわかるのか？

「性風俗雑誌」の記事からなにがわかるのか？という質問には、当時の性風俗を中心に、いろいろなことがわかったりしか答えようがない。きわめて雑多な内容の記事から、研究者がそれぞれの関心や興味に応じた情報を引き出せることが、資料としての雑誌の最大の魅力である。ただし、効率はきわめて悪い。資料探しの労を嫌う人には向いていないが、その労をいとわない人にはいろいろな宝が隠れている魅惑の資料群である。

この種の雑誌の資料としての信頼性を疑う人も多いだろう。たしかにかなりいい加減で、信頼性に乏しい記事も少なくない。その一方で、その時代ならではのリアルな情報も多い。

たとえば、戦後の黙認買春地区だった「赤線」（1946年12月～1958年3月）についての記事である。読者である買春男性にとって最も知りたい情報は、どこに行けば女性とSexできるか？である。したがって、雑誌に掲載される「赤線」の場所についての情報は正確でなければならない。親切にも電車の乗換案内まで付いていたりする。次に関心が高い情報は、女性とSexする際の値段で、たとえば新宿「赤線」ならショート・タイム600円、1時間1000円、泊り2000円という具合に、細かな情報が記される。これは、公（自治体・警察）が刊行する資料には出てこない生の情報であり、現代の「赤線」研究者である私にしてみれば、ほんとうにありがたい情報の宝庫だった（拙著『新宿「性なる街」の歴史地理』朝日選書、2018年、参照）。

また、このデータベースに収録した『風俗科学』1955年2月号に掲載された「男色喫茶店・酒場の東京地図—そどもあ御案内—」（資料番号2-18-11）という記事は「XYZ」という匿名の事情通ライターによ

る東京の「男色喫茶店・酒場」の案内で、この記事を手元に、男色仲間が集まる喫茶店や酒場を訪れた愛好者もさぞ多かったと思われる。現代の研究者からすれば、揺籃期の東京の男性同性愛世界の実情を伝えてくれる貴重な資料である。

こうして書いていくと切りがないが、私の専門である女装の文化史の資料として、初期の『真相実話』掲載の記事を挙げておこう。創刊号掲載の平野斗史「軍服の男娼たち」（1949 年 5 月）（資料番号 8-1-24）は、軍人出身のノガミ（上野）の女装男娼に取材した記事で、中国大陆に派遣された日本陸軍における同性愛行為の現実を知る上で貴重な文献で、いつかこれをベースに論文を書かなければならないと思っている。また、2 号（1949 年 6 月）掲載の大和田清志「男娼を裸にする」（資料番号 8-2-17）は、ノガミの女装男娼の生態レポートで同種の記事の中では信頼度が高い。当時のノガミの女装男娼のお値段がショート・タイム 200 円であることが、この記事で判った。

先ほど、資料探しの労をいとわない人には魅惑の資料群である、と書いたが、逆に言えば、雑多な雑誌記事から何を探し出し、それを社会文化史として位置付けるかは、研究者としての見識と技量が問われることになる。適切な歴史的位置づけをするためには、当時の世相を広く知ることが肝要であり、そのためにも、研究を志す人には雑多な内容が特色である雑誌をたくさん読んで欲しいと思う。

5 雑誌を探す

「性風俗雑誌」を探し求めるようになって 40 年が経った。1970～80 年代は、神田神保町の古書店をひたすら訪ね歩くしかなかった。性風俗雑誌を扱う店は限られているので、そのうち、巡回コースができて、少しだけ効率が良くなった。

当時、探していたのは 1960 年創刊の「変態」性風俗総合雑誌『風俗奇譚』で、とくに新宿女装世界の創立者といえる加茂梢さんの連載「女装交友録」（1967 年 6 月号～1974 年 1 月号：全 80 回）が載っている号を揃えようとしていた。当時は、まだ『風俗奇譚』の旧号の在庫も豊富だったが、私のお財布の中身が乏しく、購入には苦労した。

それでも、いつもの巡回ルートから外れた古書店をのぞいたら、欲しい号が、まるで私を待っていたかのように、平置き雑誌の山の一番上に乗っていたり、仕事帰りの息抜きに立ち寄った吉祥寺の古書店の店先に置かれた段ボール箱の中に『りべらる』や『千一夜』を見つかったり、探求の楽しさをいろいろ味わうことができた。

1990 年代～2000 年代になると、女装世界の大先輩たちが大切に所蔵していた『風俗奇譚』を「順子さんなら大切にしてくれるから」と、大量にいただくことになった。今回、データベースに収録した『風俗奇譚』の半分以上は、そうした方たちからの（事実上の）遺贈品である（P さん、H さん、ちゃんと後世に伝えます）。

収集方法が一変したのは 2000 年代後半、「股旅堂」との出会いである。「股旅堂」は店舗をもたず、年 2 回刊行の「目録」によって販売する古書店で、2006 年創業の当初から性風俗関係資料に品揃えの中心を置いていた。私はたまたま創業直後にその存在を知り、現在（2021 年 12 月、「目録」第 25 号を刊行）に至るまで、お付き合いが続いている。入札方式（入札がかち合うと抽選）なので、欲しいものがすべて購入で

きるわけではないが、『風俗奇譚』を別にすれば、データベースに収録した 1950 年代の「性風俗雑誌」は「股旅堂」から購入したものが、いちばん多い。「股旅堂」との出会いがなかったら、このデータベースは構築できなかっただろう。

収集の最後に利用したのが全国 950 店の古書店が参加する古書店サイト「日本の古本屋」である。欲しい雑誌を入力して検索すれば、たちどころに在庫状態が分かり、通信販売で購入することができる。

私は 2018 年頃から「性風俗雑誌」の収集に利用しはじめ、『真相実話』の状態の良いものを「西海洞書店」（佐賀県唐津市）からまとめて購入するなど、収集の穴を埋めるのに大きな助けになった。他にも「藤沢湘南堂書店」（神奈川県茅ヶ崎市）、「史録書房」（東京都練馬区）、「金沢文圃閣」（石川県金沢市）など、多くの古書店にお世話になった。ありがとうございました。

おわりに

居ながらにして、佐賀県や石川県の古書店と取引できるなんて、古書店を足で巡っていた頃に比べたら、まさに夢のような便利さである。ただ、その一方で、ある重大なことに気づいた。

それは、日本最大規模の古書店サイトで検索しても、雑誌の欲しい号が見つからないことがしばしばあるということだ。それまで私は、1950 年代の性風俗雑誌のほとんどは、古書市場のどこかにあると、漠然と思っていた。しかし、どうもそうではなく、古書市場にもう存在しない可能性が高いということである。昔（1990 年代）の感覚で、1960 年代の『風俗奇譚』の欠号など、お金さえ出せばすぐに揃えられると楽観的に思っていたが、市場に物がなければ揃えることはできない。

これは、かなりショックだった。購入しようにも、もう物がなくなっている。そして、そうした状況は、今後、確実に進行していくだろう（どこかから出てくるかもしれないが、その可能性は年々低くなる）。

実は、「性風俗雑誌」をデータベース化することは、長年お世話になってきた古書業界にご迷惑をかけるのではないか、というためらいがあった（今でも申し訳ない気持ちがある）。しかし、もうそういう思いを断ち切らなければならない状況になってきていると思う。早い話、私が購入した 1 冊が、市場に残っていた最後の 1 冊である可能性がある。それが、私の死後、もし、失われてしまったら、その雑誌がこの世から消えてしまうことになりかねない。

1950 年代の「性風俗雑誌」のデータベース化を決断したのは、そうしたシビアな市場状況にある。さらに言えば、遅きに失したのかもしれない。『風俗草紙』『風俗科学』は幸いにもコンプリートできたが、かなり本気で集めた『真相実話』『怪奇雑誌』『内外特報』、そして 1960 年代刊行の『風俗奇譚』ですら、完全収集はかなわなかったのだから。悲しいことだが、ある号については「もうどこにもない」、それが現状なのである。

このデータベースの意義は、私が収集した限られた範囲ではあるが、この世から失われゆく「性風俗雑誌」を後の世に伝え残すという一点にある。それをどう使うかは、後進の研究者の知恵に委ねたい。

【付記】データベースに収録した「性風俗雑誌」の書誌解説は、別稿にまとめた。